



法華宗信報

拓く



▲大正時代 日高久遠寺

明治 30 年 新ひだか町 静内▶



天四海無碍妙法 お題目總下種運動

咲かそう、いのち

宗祖日蓮大聖人御聖誕 800 年



- 2 ご挨拶 宗務総長 二瓶海照
- 4 法華宗 北海道開教への道のり～後編～
- 6 寺院の歴史 新ひだか町 久遠寺～前編～
- 8 コラム／私の住職日記
連載／北海道を知って下さい!!

154

平成29年10月1日
発行 法華宗宗務院

総長法話

我不愛身命 但惜無上道

(我身命を愛せず但無上道を惜しむ)



宗務総長

二 瓶 海 照

情報読者の皆様、前回のお盆号より編集部が東海教区から北海道教区
の担当となりました。

編集部には北海道の特色を活かした記事を期待しており、特に北海道での法華宗の開教の歴史を取り扱って頂きたい旨をお願いしております。

北海道教区には、寺院は三十三ヶ寺、教会が六ヶ所、布教所が三ヶ所
ございますが、約百三十年前、基盤
のないところからの始まりでした。

そして現在では全国十三教区の中で
四番目に多い数となっており、厳し
い自然環境の中、教線がいかにひろ
がったかが分かります。

北海道開教の歴史は明治時代、政
府が北海道開拓のため、集団移住を
促していた時期に遡ります。淡路の
法華信者三十戸百四十三名が北海道
日高静内に集団移住したことが契機
となって北海道に法華の教えが弘ま
りました。

集団移住の際、最初に与えられた
のは土地一万坪と小屋掛料だけとい
う記録が残っており、移住者の暮ら
しの大変さは想像を絶するものだっ
たと思われます。事実、食料不足に
陥り、野草を食料とするような状況
になった家族もあったようです。

そのような状況の中、開墾しつつ、



▲北海道大学内（札幌市）

布教に努め、日高静内に三光堂（後の久遠寺）の建立を初めとして、教えがさらに弘まり、現在の北海道での教線になった苦労ははかりしれないものです。

私は開教、布教に邁進された方々の精神が、日蓮大聖人の法華布教の精神「我不愛身命がふあいしんみよ但惜無上道たんじやくむじやうどう（我身命を愛せず但無上道を惜しむ）」に重なるものがあると思います。この言葉は『法華経』の勸持品に説かれている言葉です。

勸持品には法華経の教えを弘めるうえで、様々な困難がふりかかるが、その困難を乗り越え、命を賭して仏道（法華経を弘める）に励むという信心姿勢が説かれております。日蓮大聖人は南無妙法蓮華経の御題目を弘めるうえで、まさしく『法華経』

に説かれているように様々な困難に遭われました。時には命を奪われそうになることもありましたが、しかし、それに屈せず強靱な精神力をもって法華の教えを弘められました。日蓮大聖人や北海道開教の人々の精神になら、法華の教えをさらに弘めたいと存じます。

最後になりますが、十月、十一月と日蓮大聖人の御会式が全国各地の寺院で催されます。大聖人が我々のために命をかけて御題目を唱え弘めてくださいました。その忍難弘通のご生涯を偲び奉り、一緒に御題目を唱えられるよう、奮ってご参拝頂ければ幸いです。

法華宗 北海道開教への 道のり、後編、

前号では、鎌倉時代から江戸時代までの北海道仏教史をご紹介いたしました。明治時代を迎え、北海道開拓が進むと共に各宗派の布教が活発になる。法華宗の布教・寺院創設も同様に活発になり、現在の法華宗（本門流）北海道教区の礎となった。

北海道における寺院の発展

明治時代から大正初期

明治十年代には真宗大谷派（東本願寺）・浄土真宗本願寺派（西本願寺）・曹洞宗が組織的に支援をしながら布教を入れ寺院数を増やす。こうして寺院数は次第に増加し、幕末には一二〇ヶ寺ほどであったが、明治十八年には一五八ヶ寺となった。地域別では、歴史が古い渡島が七一ヶ寺、後志四二ヶ寺、石狩一四ヶ寺、胆振一ヶ寺、北見一ヶ寺。宗派別では真宗四九ヶ寺、曹洞宗四二ヶ寺、浄土宗三九ヶ寺、日蓮宗二ヶ寺、他宗は七ヶ寺と僅かであった。明治十八年以降、土族以外の入植が急増し、



北海道移住が本格化する。道内の人口は明治十九年三十万人台であったが、明治三四年には一〇〇万人台に達し、大正六年には二〇〇万人を突破した。仏教各宗派は移住した自派の檀信徒のためにこれを追って寺院を建立していった。しかし、人口密度が低く、交通不便な新開地では、自派の寺院が近くにないなどの理由で違う宗派に属することが多くみられた。他宗には遅れるが、明治十八年兵庫県淡路島の法華宗信徒による宗教団体移住により、法華宗（本門流）の北海道開教がなされる。その後、大本山本能寺・大本山本興寺の命による布教所開設、香川県國祐寺による布教所開設、渡辺日慧の日蓮宗からの転派による布教所開設、信徒である開拓移住者の要望による寺院設立と法華宗の寺院の創設が始まる。

北海道移住が本格化する。道内の人口は明治十九年三十万人台であったが、明治三四年には一〇〇万人台に達し、大正六年には二〇〇万人を突破した。仏教各宗派は移住した自派の檀信徒のためにこれを追って寺院を建立していった。しかし、人口密度が低く、交通不便な新開地では、自派の寺院が近くにないなどの理由で違う宗派に属することが多くみられた。他宗には遅れるが、明治十八年兵庫県淡路島の法華宗信徒による宗教団体移住により、法華宗（本門流）の北海道開教がなされる。その後、大本山本能寺・大本山本興寺の命による布教所開設、香川県國祐寺による布教所開設、渡辺日慧の日蓮宗からの転派による布教所開設、信徒である開拓移住者の要望による寺院設立と法華宗の寺院の創設が始まる。



▲大沼から駒ヶ岳を望む



大正初期・昭和初期（太平洋戦争終戦）

明治二十年以降は北海道の内陸開拓が進展、石炭等の工業の殖産も進展し人口増に伴い、各宗派は移住した檀信徒の居住地で寺院・説教所が増加した。法華宗寺院は、渡辺日慧の徒弟の布教による布教所開設、信徒である開拓移住者の要望による布教所開設、炭鉱・製鉄等の工業発展に伴う人の増加にあわせ布教所が開設されていく。

北海道における法華宗寺院の開教と拡がり

開拓初期（明治～大正時代）から昭和初期（太平洋戦争終戦）における法華宗の北海道寺院設立の特徴は、大きく以下に分かれる。

（一）法華宗信徒の宗教移住による寺院設立

・日高久遠寺

（二）本山及び寺院による布教所設置による寺院設立

・帯広蓮承寺 ・妹背牛本尊寺
・留寿都本國寺 ・札幌久遠寺

（三）日蓮宗及び法華宗（他派）からの転派をきっかけとした寺院設立

・倶知安本因寺・赤平日源寺

（四）信徒である開拓移住者の要望による寺院設立

・栗山本門寺 ・斜里本行寺
・函館本妙寺

（五）道内で創建した法華宗寺院の住職及び弟子の布教による寺院設立

・豊浦本法寺 ・比布本宣寺
・室蘭経王寺

（六）ほぼ未信者の地にて布教し寺院設立

・釧路本祥寺 ・旭川白蓮寺

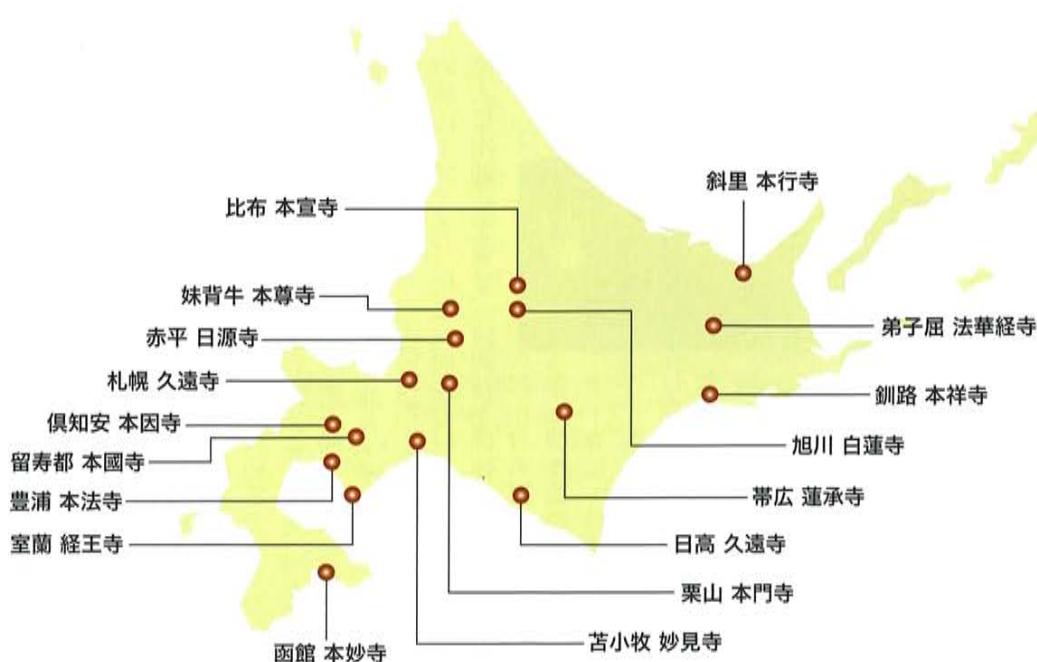
太平洋戦争の戦後、道内各地に法華宗寺院・教会が創建されていく。僧侶と檀信徒が異体同心・寺檀和合により、厳しい気候、不便な環境を乗り越え、現在に至る。

本年（平成二九年）は、明治十八年の法華宗（本門流）開教から一三二年となる。道外の寺院にとつて百数十年歴史は短いものかもしれないが、道民が感じる北海道の一三二年は充実し中身の凝縮された年月である。長い歴史の地域では伝説のような未開の地からの寺院創設、発展の経緯が実感として残っている地域が法華宗北海道教区である。

【参考資料】

- 『法華宗門史』宗門史編纂委員会編
- 『法華宗北海道教区年表』法華宗北海道教区宗務所
- 昭和四十七年二月編
- 『新北海道史』北海道

【太平洋戦争終戦前の法華宗寺院】



法華宗 北海道開教の寺

「久遠寺」

法華宗信者による北海道開教

北海道の太平洋沿岸日高地方に法華宗北海道開教の寺院「久遠寺」がある。明治時代、宗教団体で移住し、苦難を乗り越え開拓を成し遂げ、法華宗北海道最初の寺院建立を達成した。

法華宗の北海道開拓は、日高地方静内（現在の新しいだか町）から始まった。明治十八年四月四日兵庫県淡路島の洲本港を出発した宗教開拓団が同月十二日北海道日高国静内郡下下方村（静内）の浜に上陸した。渡辺伊平を団体長とするこの宗教開拓団は、幕末の時代、高松八品講を興した松平金岳公子の教化を受けていた法華宗の信者たちであった。この法華信仰を心の支えとして異体同心異口同音にて厳しい北海道開拓を成し遂げた。そして、平成二十七年開拓百三十年を迎えた。

幕末から明治初期における淡路島の高松八品講

江戸時代天保の頃、高松藩城主の長子松平右近頼該公（以下金岳公子）は八品講を組織し、四国・中国・近畿・九州地方各地に信者が増え法華信仰の弘通教化に日夜奔走された。淡路へ

も嘉永の頃より金岳公子の門人等が布教を行い、信者も増えてきた。文久元年に淡路片田講中へ金岳公子御真筆の御本尊を賜り、講中一同益々信心に励んでおりました。（この御本尊は、現在も久遠寺の什物である）

明治十年頃から淡

路片田講中より讃岐高松本覺寺へ、適當なる講の指導者の派遣を懇願していた。明治十一年春、金岳公子の門人であり九州地方への弘通伝道を果たし帰国した讃岐国出身の渡辺伊平がその任を承諾し、明治十一年五月渡辺伊平と家族は淡路に入り講中は拡大していった。

法華宗信者による北海道移住

講中は、明治十五年から十七年にかけて、様々な問題により困難に陥る。講中に米国ハワイへの移民の声も上がるが、米国渡航は老幼女子には難しいと考えている折、明治十七年淡路阿万村の人たちが官費にて北海道へ移住する事を聞き、講中は検討の結果、北海道の移住を決意する。すぐに戸長役場での手続きを済ませ、そのまま兵庫県庁及び東京農商務省へ出頭出願をする。しかし、出願時には官費移住の募集は締め切られ、補助は土地一万坪と小屋掛料二十円だけである事を申し渡され、やむを得ず淡路に帰国する。官費移住であれば、全三十三戸揃って



移住できるが、自費であれば十戸以内しか移住できない状況であった。講中の全ての資産を売り払い共同の財産としたが全員の船賃にも足りず、荷物の船賃は全くない状況であった。渡辺伊平は講中の死活にかかる重大な状況であることから、非常の意をもって、神戸の三菱に交渉したところ、三菱の支配人田中氏は熱意に動かされ、荷物は一切無賃、人だけの船賃でよいこととなり、全員での北海道移住が可能となった。

明治十八年四月四日淡路洲本港より汽船和歌浦丸に一同乗船し、横浜・仙台・函館を経て、同月十二日北海道日高国静内郡下下方村（静内）の浜に上陸する。戸長（現在の村長）や稲田氏役人に出迎えを受け、渡辺伊平団体長は戸長に



移住者名簿を提出する。団体長の家族は下下方村に一戸借り受け、他の移住者一同は漁場の網納屋に落ち着き、日蓮聖人の御命日には仮祭壇に御本尊を安置して御講をお勤めする。翌十四日、婦女子は、稲田家その他へ分宿し、団体長及び男子は戸長の案内より、開拓地として割り当てられるルベシベ村字ベラリ（久遠寺がある現在の豊畑地区）に到着した。

苦難を信心で乗り越えた開拓

見渡す限り樹木うつそうと生い茂り四方への



開拓遺跡碑

渡してもらう。渡し賃は五銭から八銭も取られ、ようやく川を渡れるが元より道の無いけわしい岸をよじ登るも、荷物が木の枝に引っかかり闇夜をさぐりさぐり這い上がる。死出の山路とはこのようなものかと思うほどの

見通しはきかず人家は一戸も見当たらず、原野に野火のため消失した場所があり、そこで昼食をとり、宅地の適地を見定めるための調査を行った。夕方になったため、現在の開拓遺跡碑のある場所ですべて三晩野宿し小屋掛けに取りかかった。まず四間に八間(三十二坪)の草小屋を建て、東小屋と名付け、さらに同じ小屋を建て、西小屋と名付け、浜よりルベシベ村に婦女子を呼び寄せ、この二カ所に分宿した。

その後、開拓団は三組に分かれ、団体長の指示を受け、開墾にかかった。浜からの荷物の運搬にも困難があった。道路もなく、馬車やトラック等もないため担いだり背負ったりして荷物を運んだ。馬を一日借りると二十銭必要なので日雇いをして、馬の借賃を支払った。また、日雇いをすれば、組の開墾が遅れるので、荷物を取りに行こうとする時は、前日組頭へ願い出て許可を得た上で、朝は未明に起きて支度をして浜に行き三里の道を引き返し、開拓地近くの川に近づけた頃には日が暮れて、夕飯時を過ぎれば川番がないためアイヌの人たちに頼んで川を

困難であった。ようやく小屋にたどり着けば鶏が鳴く頃、夕食を食べて寝る間もしばしであった。朝は早く起き三宝を拝し、支度を調べ、仕事場への集合の合図である拍子木が聞こえると、皆揃って仕事場へ向かった。

戸長より土地の仮渡しを受け、開墾に取りかかったが土地は荒地、道具は淡路から持参の鋤等で中々はかどらず、ようやく耕し大豆・粟・芋・蕎麦を蒔き付けた。団体長と石浜平治が原野木原を見回り、開拓地所を選んで役場



に出頭し、開拓団全戸に仮渡しを認められ、移民補助金として一戸あたり金二千円小屋掛け料、種子代として下付された。

一同は宗教移住団体の精神をもつて一家の如く協力一致異体同心にてあらゆる困難辛苦を身に受けながらも、怠けることなく益々勇をおこして開墾に従事した。稲田藩の開拓者や宮内省御料牧場より馬数頭、蕎麦・粟・きび等の種子が寄贈され一同一層開墾一途に励んだ。朝は未明に起き出でて夕方遅くなるまで仕事をし、月星を戴いて小屋に帰る。小屋の一坪半に荷物を置き、三度の食事支度、寝入る時は人と人が重なりあい、寝返りすることも難しく、掃除洗濯をする暇も無く、のみ・シラミが湧き体中に食いつき眠れない。昼はアブ・ブヨ等多く所構わず食いつき、

かきむしり出血し、腫れあがり、婦女子の手足・顔等血膿が流れ出し、見るも可哀想な有様であった。

淡路から持参した食料は食べ尽くし、官米も悉く無くなり、止むを得ずヤチ草・ウド・アザミ・伊蘭草・ふぎ・ヨ



モギ・アカザ等の食べられる野草は何でも食べて開墾した時の難儀は言語紙上に尽し難いものであった。この年は一戸あたり五反(千五百坪)程度開墾播種することができた。播種が終わると、渡辺伊平団体長の住宅建設に取りかかった。十月十二日まで新築を果たし、この住宅で日蓮聖人の御正當法要を盛大に厳修することができた。初めての収穫は、播種の時期が遅かったこと、反別不足であったことから、わずかな収穫となった。収穫後、各戸別に二間に三間(六坪)位の草小屋を建て、東西二カ所の小屋より引越し、各々家族が安堵することができた。冬を越し春には各自毎に小さい納屋、一頭入りの馬屋を建てて融雪をまち、開墾にかかった。

【次号へ続く】

※久遠寺第三世末澤日念上人遺稿『移住と開拓』より抜粋
※参考文献 『開村五十年記念 北海道日高豊畑本門仏立講

沿革誌』

北海道を知って下さい!!

北海道あるある!! ~難読地名編~ その1

北海道には難しい読みの地名がたくさんあります。その多くは先住民アイヌの言葉に由来します。地名を想像してみてください。

①倶知安

虻田郡倶知安町 アイヌ語の「クチャ・アン・ナイ」(小屋のある川)

②温根沼

根室市 アイヌ語の「オンネ・トー」(大きな沼)

③馬主来

釧路市 アイヌ語の「バシクル」(カラス)

④納沙布

根室市 アイヌ語の「ノッサム」(岬の傍ら)

⑤齒舞

根室市 アイヌ語の「アボ・オマ・イ」(流氷があるもの)に由来

⑥比布

上川郡比布町 アイヌ語の「ピオブ」(石ころだらけ)

⑦輪厚

北広島市 アイヌ語の「ウツ」(あばら骨)

⑧発足

石狩市、岩内郡共和町 アイヌ語の「ハツタル・ウシ」(淵があるもの)

⑨生振

石狩市 アイヌ語の「オ・ヤ・フル」(尻が陸に付く丘)

⑩花畔

石狩市 アイヌ語の「パナウンクル・ヤソッケ」(川下の衆の漁場)に由来

⑪梨野舞納

岩内郡共和町 アイヌ語の「リヤム・ナイ」(年を越す川)

⑫積丹

積丹郡積丹町 アイヌ語の「サク・コタン」(夏の村)

⑬晩生内

樺戸郡浦臼町 アイヌ語の「オ・ショキ・ナイ」(川尻が崩れている川)

⑭占冠

勇払郡占冠村 アイヌ語の「シ・ムカブ」(鶴川の主流)より。(鶴川は、アイヌ語で塞がる川を意味するムッカ・ベツから)

①くっちゃん ②おんねとう ③はしくる ④のさっぶ ⑤はばまい ⑥びっぶ
⑦わつつ ⑧はったり ⑨おやふる ⑩ばんなぐる ⑪りやむない ⑫しゃこたん
⑬おそきない ⑭しむかっぶ

「私の住職日記」第2回

苫小牧妙見寺住職 末澤 隆 信

「ダニーボーイ、月の砂漠、そしてお題目」

今年の3月、国際電話がかかってきました。懐かしい女性の声。24年前、私が法華宗サンフランシスコ仏教会に開教師として赴任していた頃、お世話になった信者さんでした。「毎年、主人の命日に花を送ってくれてありがとう。この夏、主人の年忌がやって来ます。これを機会に現地までぜひお会いしたいのです」その方の心の奥に私の思い出が生きていた。そして自分を再びアメリカに運んでくれた。そんなお題目の縁を、心から有難いと思いました。

7月の始め、サンフランシスコに到着。教会本堂でその年忌法要は行われました。本堂には一台の古いピアノがあります。法要が始まる前、10名の参列者がピアノの前に集まり、一人の女性が静かに曲を弾き始めました。故人の好きだった歌、アイルランド民謡「ダニーボーイ」。一緒に歌いながらいつの間にかみんな泣いていました。私も再会と故人への思いで胸が一杯になり、涙がこみ上げてしようがありませんでした。次の曲は日本語で「月の砂漠」。歌のさびしさが胸を打ってなおさら泣けました。その後の法要でみんなが声をそろえて唱えたお題目の声は力強く、手を合わせる姿は尊いものでした。アメリカの地に、支えあい励ましあう日本人の心と、ひたむきな法華宗の信仰がしっかりと生きていました。

北海道もアメリカも、本門八品のお題目が順番で言えば後の方に伝わった場所。それは、より多くのご縁が関わっているということ。北海道の地で唱えているお題目の有難さをサンフランシスコへ行って気づかされました。お会式の季節、今、唱えているお題目を自分に伝え、渡して下さった多くの方々に想い、感謝の心を新たにしましょう。



法華宗サンフランシスコ仏教会

編集後記

本年も秋を迎え、日蓮大聖人御会式の時期となつて参りました。皆様「イランカラッペ」今号もお読みくださり、ありがとうございます。少しづつではあります。北海道開拓・布教の厳しさを感じていただけに、まずいでしょう。私達編集員も執筆・編集していく中、改めて先人の築かれた功績に気付かされ、感謝の気持ちで胸がいっぱいになります。

さて、現在我々は一日あれば様々な場所に行く事が出来る時代ですが、この広大な土地の北海道では、近隣寺院といえども、遠方では数百kmと近隣とは言えないほどの距離があります。その為に北海道の「御会式」はそのような事情から、二日間の日程で行われる寺院がほとんどです。長距離を移動し法要を終えた後は「こわい」と思う時もあります。先人の重ねてきた各寺院までの道の苦勞等を考えると「こわい」と思う時点で、いかに私達が怠惰な生活をしているのか考えなければなりません。

「御会式」は日蓮大聖人に報恩感謝する法要であると同時に、我々の今の生活を見直し、向き合う為の法要なのではないかと最近切に思うばかりです。皆様も感謝できる事を当たり前と思わず、貴重なことと捉え、一層御先祖様への御供養を厚くしていただきたいと願うばかりです。

※「こわい」とは北海道弁で「疲れた」「だるい」の意味です。

法華宗信報

NO.154

平成 29 年 10 月 1 日発行 発行人/二瓶海照 編集人/千葉啓佑

編集部/〒 078-0349 北海道上川郡比布町寿町 1-2-8 本宣寺内

発行所/〒 103-0013 東京都中央区日本橋人形町 2-19-1 法華宗宗務院

印刷所/富士プリント株式会社

TEL.0166-85-2657

TEL.03-5614-3055